

## 日本医学会分科会活動報告

公益社団法人 日本臨床細胞学会  
理事長 佐藤之俊

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

臨床細胞学を基盤とした細胞診は侵襲性が少なく様々な疾患の診断に広く用いられている。このため、その精度管理や研究・教育の普及および広報は国民の健康を守るために必須である。本学会では年2回学術集会を開催するとともに、年6回講習会およびセミナーを開催し、臨床細胞学に関する教育普及活動を行なっている。班研究活動への助成による学術研究を行なっており、学会としての研究活動として、「一般住民を対象とした子宮頸がん検診における液状化検体細胞診とHPV DNA検査との併用法の有用性を評価する前向き無作為化比較研究」を実施している。

また、臨床細胞学に関する細胞診専門医並びに細胞検査士の資格認定、更新を行なっており、2020年度細胞診専門医として新たに56名の認定、また626名の更新を行なった。細胞検査士としては新たに253名の認定を行なった。この他、教育研修指導医の資格認定も行なっており、2020年度は48名を新たに認定した。細胞診断の質を維持、向上させるための施設認定、研修を行なっており、臨床細胞学に関する外部精度管理事業には2020年度は822施設が参加している。

さらにゲノム医療に対応するため、ゲノム診療における細胞診検体取扱いの標準化に向けた実証データ取得およびそれに基づくガイダンスの作成を行った。

b. 当該領域における国際的な役割

国際細胞学会（IAC）と合同シンポジウムの開催など連携しており、資格認定も行なっている。2020年度145名に対し、IAC資格更新を行なった。また、肺癌細胞診の診断基準の改訂と国際基準の策定を行なっており、乳腺細胞診についてIAC Yokohama Systemを確立した。さらに日韓、日中、日タイ、日米との共催事業、豪州との人事交流、カンボジアへの支援を実施している。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

新しいがん検診スタイルに適応した細胞診専門医のあり方を検討し、細胞診断の社会に果たす役割を明確にしている。また都道府県にて子宮頸がん検診推進活動を行い、細胞診断の質を維持、向上させるための活動を行うことで、医療の質の担保に寄与している。さらに一般住民を対象とした子宮頸がん検診における液状化検体細胞診とHPV DNA検査との併用法

の有用性を評価する前向き無作為化比較研究を学会独自に行なっており、細胞診の社会的意義について明らかにしている。

d. 学会運営上留意している点

理事長を中心としたガバナンスを構築し、常置委員会以外に理事長直轄のアドホック委員会やワーキングにより、社会から要請される事案に対して迅速に対応している。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

日本肺癌学会との合同ワーキンググループの活動として、WHO の肺癌細胞診の国際的判定基準作成事業に参加している。